

玉ぶち

池本奇操作



上

ふ

ち

全

池木周山著





玉
ぶ
ち

池本奇璨作

序

頑たる砂礫はいかなる處にもころがりて在れど、寶石又は寶玉杯は尋常一様の地には存し居らず。さればこそ、古代より人之を珍とし、聖佛の華座、聖神の寶位を飾るには、必らず光輝の燦たる青玉、赤玉、黄綠玉、紅瑪瑙、白瑠璃等を以て作り上げ、現に莊嚴麗美を極むるか、しからざれば、已に嚴淨光麗を盡せし處と假想して、各自歸依の信をさげしならん。

こは、摩尼、眞珠、珊瑚、瓔珞等の名稱が佛典に多く記るされ、紫の玉、深紅の玉、金剛石杯の文字がバイブルに少からず載せあるを見ても知るべし。

池本奇璨氏は詩僧なり。この頃、平生の吟詠を集めて一冊子とし、書を寄せて、余に題名を問ふ。余は直ちに之を玉淵たまがらと名くべしと云ひしに、そは過分なりと謙す。余曰く。そはもとより過分なり。然れども余の意は君が詩集を寶玉の淵叢として、

世人に就いて見よと勸むるにあらず。げに君が棲遲は武藏の名所、玉川の里、君が名は奇璨。それ其の碩礫を翫びて、而して玉淵を窺はざるものは、未だ驪龍の蟠るところを知らじと文選にながしは戒め、眞珠を探らんとせば、深く海底に潜入せよと詩人ブラウニングも警せしにあらずや。又牡蠣は身に傷處あらば眞珠を以て飾ると科學者が云ひしやう覺えたり。況んや、君が朝暮、正坐西向して誦する所の佛典、何を以て貫綜繚練してありや。君之れより仰いで天空の高きにも玉淵を専念せよ。俯して海洋の深きにも玉淵を冥想せよ。又古代のユダ人、印度人の思想が何如に壯觀巨麗なりしかを想見せよ。然らば集の題名、亦以ていよく君が生涯を資せんと。君又書を寄せて、一言題意のある所を録せんことを乞ふ。余曰く諾。

明治三十八年
八月三日夕

林 外

をかしき淵は、かしこふち、ないりそのふち、
あを色のふち、いなふち、かくれのふち、のそ
きのふち、玉淵なりと清少納言はいへど、わ
が「玉ぶら」は、あまりにつたなくて、素よりま
やうにかぞへらるゝ程のものにはあらず。
さりとして之れを窺へば、わか幼き姿、かすか
にうつりて、またいとをかし。

目次

短詩

巨鐘.....一

瑠璃甕.....一九

小笠.....三六

杜鵑花.....五二

長詩

木佛.....五五

梅檀林賦.....五八

目次

うもれし戀	六一
あるかなきかのとげ	六四
幽界の少女	六六
羊麻草	六九
白百合の精	七二
白毫光	七七
思はれ人に	八一
金絲雀	八五
人間は	八九
蘆笛	九二

廣大池のほとり	九八
落紅	一〇六
わかば集	
渦	一一〇
虹	一一一
文机	一一三
寶冠	一二四
追分	一二七
靈鳥の歌	一三三
何の響き	一三八



泉

目次をばり

龍女の歌

目次

一三九

玉ぶち

池本奇璨作

巨鐘

水の上に敷かきながす筆すてゝわが派は
やすき天あめの黙示もくしよ

玉ぶち

またひと日蕪村の發句のなかに栖む人の
ごこくもほゝるみにけり

啄木鳥に食めとや云はむうつろ木の朽木の
音するわが歌なれば

あゝ誰れの手によるの戸をひらく
響きの音か秋風

夕鐘のうづまさ渡る音の中なかにまかれて啼
くよ里ほとゝぎす

旃檀の林に朝の靄はれて神話に似たる春
はきたりぬ

墨染のころもをさくとひゞきぬる乾反葉
そよぐから風の音

人を追ひてたどりし道は闇に入りそこに
魔が手の鐘高う鳴る

君ゆかば寒き日あらぬ國にゆけわれまた
ゆきて花をつみなむ

わが瘦せし影にふれたる響きとはしらで
秋風悲しといひぬ

あけぼのの七重の雲のなかに寐て我ひと
りだによき夢見なむ

わがいのるたかきおもひはそこに見むも
ゆるほのほの中の白蓮

世の波はなべて哀歌のひびきありたよる
は愛よひろき海原(獨絃哀歌の作者の君に)

闇なかにひそり泣かれてすべもなしわれ
永劫を光明しらすよ

詩の御座にうま酒ゆるせ謝靈運るひて泣
きぬる白蓮の園

火のなかのいまはの時やいかなりし我も
すべなし血の筆つきぬ(鳥島噴火の報に接して)

金殿の扉はあきぬ日はさしぬ歌の神秘ぞ
今またれぬる(師の君に)

天地にわが魂うせて寂寞の泉となるもの
ぞみやすかれ(ロセツテイより)

み佛に鞭うたれどもわがおもひなほやま
ざりき世のつねの道

閻王えんおうにつみせめられてそむきても今宵こよひは
かくてあらむおぼろ月

雷いかづちのおごろおごろとくだる雲このわれの
せて光明ひかりあらぬか

道なきをせむる日本やまとのいくさ船この我の
せよわれもますらを

思ふことちからの力くちじのをろち魂たままたの世
またも筆と化からばや

いかでわれ天魔てんま波旬はじゆんのたまとなりおもて
となりてこの世こぼたむ

おごろあざみ下界げかいはとほの闇やみなれや悪魔あくま
となりてわれすみて見む

鞭うたずわれをいさめぬ胸の神自然は才
の力なるもの

われぞいま宿世のさちにゑまれぬる聖旨
にあけば歌を枕に

この秋に君うたはずやふさはずやアナク
レオンの歌のひとふし

わかき子のこれや宿世のさちなれば貝多
羅葉の蔭ふかゝれな

歌に見よ幸を負ふべきすべしらず世にさ
すらひのわがうしろ影

大なる光はとはにくちざりきおどろの我
も拜む釋迦牟尼

經きやうさむき聖ひじり者の室むろにうつされて尙なほくれな
るや石楠しやくなんの花

うまさけに忍しのへる情なさけの君きみが句くよむかしの
春のわが世よに似たり

この世にもすめばゆかしきものなれや九
品くほんの佛ほとけ觀くわん世せ音おん菩薩ぼさつ
紫むらさきの霏ふいのあと追おふ風かぜや夢ゆめや失あ意いの人ひとに萩
こぼれ咲く

わが幸さいはさかまく渦うずのまなかにと天あめはを
しへぬ地ちはうたひぬる

蓮れん月げつを姉あねにえし世よのわれならばかくは泣
かじをかく歌うたはじを

白蓮びやくれんの中にこもると恨うらむなかれミユズな
さけのまねきとおもへば

ちぎれゆく雲のわが空そらみるなべに才ざえのを
のこのゆく方に泣きぬ

白藤しらふじの花かげながき堂守だうまもりゆふべさびしく
鐘つく身なり

禪房ぜんぼうに興きようをそへむと枇杷の花啄つばきみこし鳥
の翅つばささびしき

いさゝかは慰藉なぐさみえたり光ひかりえたり金木犀きんぼしの
あわき香かのうち

秋あきの夕鐘ゆふかねの音ねにのり冥府よみの扉かどをひらかむ
とおもふわれにもあるかな

三日^み月^{かづき}にわれ枕^{まくら}してグリースのふりにし
夢^{ゆめ}を見るおもひかな

あられふり鹿^かなく夜半^{よはん}を燈^{ともりび}にわが影^{かげ}瘦^やせ
て成^なれる佗^たび歌

瘤^{こぶ}なで、眉^{まゆ}ひそめたる瘦男^{やせおとこ}その瘤^{こぶ}とらば
なほやせるかも

明星^{めいせい}の光^{ひかり}もいまほうすうして菩提樹^{ぼだいじゆ}のか
げうたふ子^こを見^みず

このもだえ悪魔^{あくま}がすめるおほ洞^{ほら}になげて
も見た^みき秋^{あき}の夕^{ゆふ}ぐれ

利^きの夕^{ゆふ}べおもひわづらふ興^{きよう}の間に小猫^{こねこ}か
みぬるこのちさき筆^{ふで}

玉ぶち

けがれなき詩の魂われは祈りいのる平和
の神とく降りませ

誇りてはわれとなやめる力わびずたいこ
のまゝに行かむと思ひぬ

瑠璃甕

あなやさし水を出でたる白蓮しらばすの華はなのまな
かにおはすべき君

金屏に立ちしかなしきおん姿すがた君よといへ
ば夜はあけにけり

玉ぶち

大空^{おほぞら}や丹塗^{にぬり}の橋に丈の袖えならぬひるの
七いろの虹

紫のいどくりかへすをぐるまとなりても
見たきわが世なるかな

なにとなう若草千草にいねしよりやさし
うなりぬわが思ひごと

歌びどの千人^{ちたう}が汲みし奇^くし泉戀^{いづみこひ}をむすぶ
につきぬよろこび

胸をさく思ひに狂ふわれやいま太息^{こいき}は凝
りてみな歌となる

おのれから火の家に栖^いむわが煩悶^{わだいな}片戀^{かたこひ}な
れば胸のくるしき

紫の精をしぼりし瑠璃の甕いだきてゑめ
ばまたあたゝかし

天の羽をうけしみ胸の秘め鳩はあさき情
の手もて抱くな

わが思ひうもれし種にかよひてか生ひし
すみれの花うつくしき

酔ひ泣きは伯父の憶良をまねぶべし世に
わびぬれば酒ぞよろしき

あこがれのかつての春の手にふれし花は
なきかなあゝ小さき國

めしひなれば眞黒き花にふれもせし罪と
おぼさば神よゆるさせ

冷えし海の血潮に貝をわれひろひさては
あだなる戀のぬけがら

詩にこもる情は春のあたゝかき夢に更け
ぬる若子に似たり

わが想ひのせて流し、野の水を渡る子あ
らば名だにとはゞや

いさゝかは似たりや春のながれ水むつる
るおもひ抱きていなむ

春瘦の罪なつかしき參籠や朱欄にかゝる
むらさきの雲

ゆく春や七日七夜の參籠のそのかへるさ
に君を見てける

あゝ戀よぬればまた夢さめぬれば人はい
かれど歌わすれざる

わが胸にひめし情を盗む子はうつくしう
して逐ひがたきかな

天の燭その美しきみ光のかけにかくるゝ
星のさゝやき

わが思ひ春野に見たる花のごとむらさき
にしてうれひを知らず

ゆるしたまへおもはれ人とのろはるゝ罪
もこの身にうつくしければ

露がくれ春野の水のゆらぐ思ひたのしき
かなや曙の夢

われそゝろ水に別れしその春の夕べとお
もへ桃にかゝる雲

うつくしき人と居ならぶ梅の夜を色紙百
帖ゆるせ歌びと

流れてはまた小波にたゞよへる野茨のご
とくわれは狂ひぬ

金堂の欄にそへぬる緋の牡丹めをのはね
獅子いときづかはる

年ごろをやめばかよわになりまさり鬼の
額うつ夢もあらずよ

詩に燃ゆるこの靈の子の唇にしばしふれ
ませ情に泣く君

梳りたまへ丈の御髪は罪ならず天の香を
もつ美しき人(有髪の尼君におくる)

むすばれし清水ははやもぬるみきぬわが
胸もえぬ君がおん手に

玉腕たまうでに盛りしきよらの子やすがひ青あをなる
眉の君に贈らむ(ある時)

いつの世かわれも小さき笛とりて人の小
琴の歌に合さむ(この二首はな子の君に)

おなじ詩をおなじ武藏にさゝげぬるわれ
らに神はなさけおはすよ

友の詩に涙ぐむやと妻めに問はれこゝろと
きめく春のおぼる夜

菱の籠とれる少女よ昨日かも水に泣きた
る人のおもかげ

幸なれや松葉はとほに狭うしてあだしご
ころの歌はかゝれず

戀の精こもる星かげ羽にうけて蝶のねむ
れる桃のはなびら

人しれぬ戀のみ魂や流れぬる里の玉川君
の春夢

わが戀は誰に似るとも云ひ知らず小百合
いだけばほのほど燃ゆる

ちさき胸ときめくごとにうつむきぬ春の
宮居のあてなる人に

この歌をさながら秘めてこの宮を君にお
くりてゑまむ春かな

春神のすねし夕べのなつかしやわれにお
ぼえしうつくしき戀

ゆかし音やあら美はしき黄金姫羽や戀の
世かたれ小さき金絲雀(以下絶句)

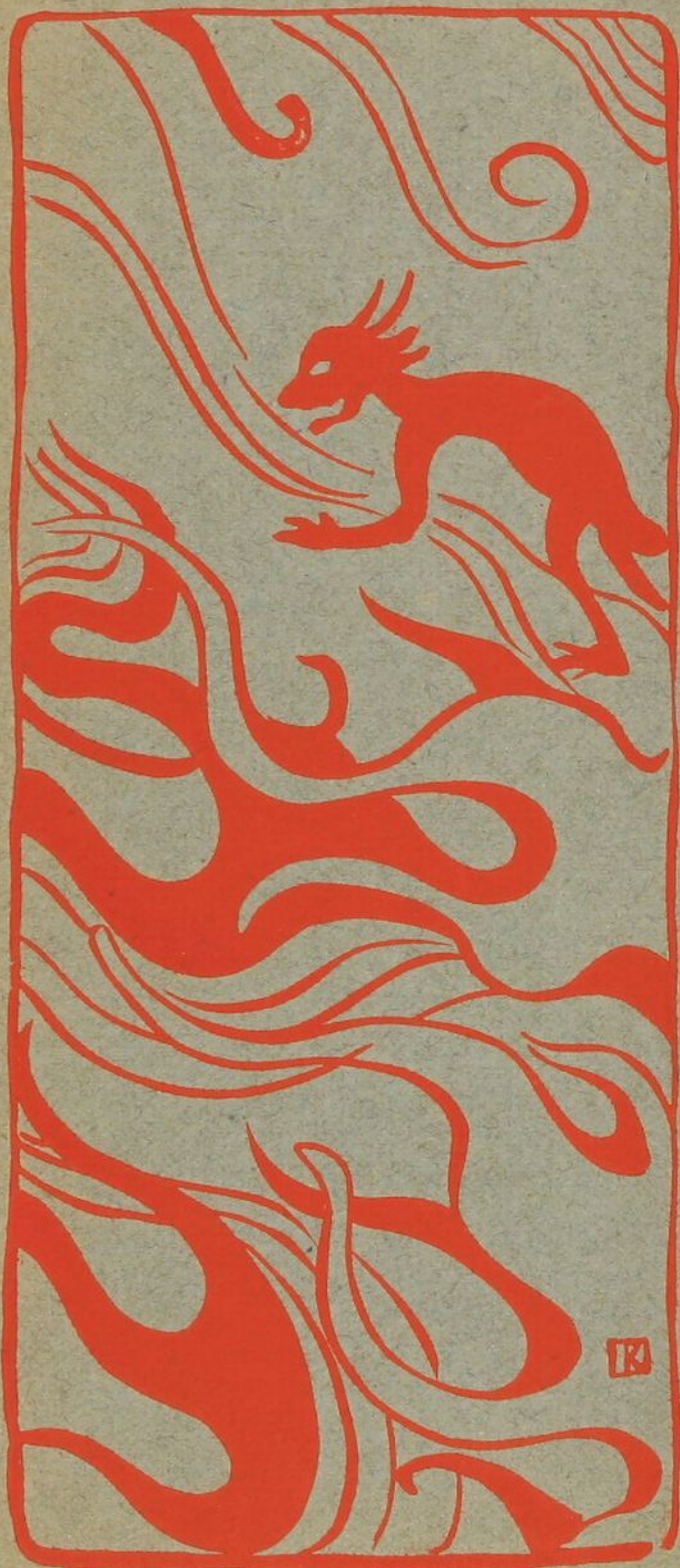
金絲雀を放ちてやれば秋のたそがれまた
さびしみを啄みてかへりぬ

なつかしき目は戀夢か口はあだこと姫羽
は誰の榮か金絲雀

小笠

袈裟けさときて歌反古つゝむ旅さびし鳴立澤
にわれも秋の僧

藤おほき濱松ごしの帆印や蝦夷えぞ唄うためでし
去年こぞの鮪船しほぶね



神 魔

白檀びやくたんをたぐや夕べの奈良の寺廻廊くわいろう西に牛車一つあり

蓼れうにこもるあはれは誰の秋の世ぞ蟋蟀こほらき啼くよ野べのほそみち

しづやかにあけの野をゆくほそ流れわか葉月かげ水に淡きかな

玉ぶち

牧笛まきふえのさびしきふしは誰にえし與よ作まいら
へず牛の背にして

むらさきの雲おもげなる春はる供く養やう御み堂だうは花
の雨あめや羅漢らかん寺ぢ

春のひる舟歌ふねうたうたひ里川りがはの合歡あはれの木か
げ

蓼れうおほき牧をながるゝ里川りがはのあさあけえ
たる畫ゑのけしきかな

白鳩はくきうをはなちて夢ゆめの占うらや見む暮ほ雲うんをおく
る伊太利古城いとうりこじょうに

櫻狩さくらがりかへる家路いへぢに酒はなし峠とげひと村日は
うすづきぬ

姫石ひめいしのしろきをえりて秋の句くをかゝばや
と思ふ武藏野のみち

紫の武藏の野すゑ瑠璃色りうりいろに下は小筑波上
は遠富士

菜の花のそよかせ渡る武藏野のおもはぬ
かたに牛のこゑする

長き川ながめていにし武藏びと夢やすか
れな川下かはしもにして

草の屋の村も名所の興きようの雨堅田かたたの人に雁
とひて見る(以下拾首、友麿舟と京都近江及び北越に遊びて)

白壁に水うつくしき大津市桃おほつさくらのかすみ
に別れを泣きぬ

志賀の海おほるにかすむ春の月石山寺の
君もさそはむ

一つおちて二つ落ちぬる簀椿うす露ゆら
ぐあけほのゝ嵯峨

詩はさびぬ思ひはうせぬ釋迦佛のほゝる
みさびし嵯峨の夕雲

南禪寺松葉こぼれて道ながし小雨も興や
傘はからずよ

美しき敦賀はこゝよ春草のかをりにむせ
ぶ神おはささずや(越前の敦賀にて)

越の子の唄も名所のおもむきと笠を片手
にすぐる志比口(福井より永平寺にゆく道を志比口といふ)

桃青の日記ひもとくに秋さびしさに似た
らずやさすらひのわれ

京の子にたびし盃手にうけて遂にこぼた
ず祇園の一夜

こゝもまたふる郷なるよなつかしやわが
手握りしちごはいづこぞ(とせふりにて郷里下野にかへる)

年ごろを戀もわたりし心地して一夜夢み
ぬふる郷の人

ゆきずりにふとたゆたひていはざりきよ
しある人に面似たる君(以下四首鎌倉に遊びて)

鎌倉の二夜の宿も身にしみぬまた實朝の
詩巻あらぬか

うらめしとわれも舌かむこゝちしぬ怨み
にくらき親王がみ靈窟(鎌倉宮にて)

にぶきわが筆をになうてこゝにまた富士
の姿すがたに歌はづかしき

水樓の瀬風せかぜに一夜ひとよさまされぬ胸にひめに
しうつくしき夢(以下二首、伊豆の修善寺にて)

流れては岩にくだけてかつはちりかつは
くだけで何になれとや(桂川をながめて)

からあやのきぬにつゝみし白玉の箱のご
とくもうつくしき宿(この二首、秩父に遊びて)

なにとなうこゝろゆく里こは秩父ちぶ葡萄は
あまき水とのみ知る

歌ひとつ小笠にかゝば足る秋の旅のおご
りを魔もねたむかな(以下八首、友と妙義に遊びて)

いくむかしおちにし星の勾ひなりや岩間
にちさき紫の花

木枯の一夜枕のなごりかもその精ならむ
われさそふごと

おもひ居れば黒き胡蝶のそと倚りぬあゝ
わが君はいまいかならむ

神秘ゆするおもひにほこるわれなればこ
のまゝ翅をおひてゆかむかな

さながらによみじにつゞく岩坂の岩門く
いるにためらひにける

ゆく秋のみ靈を追ひてわれしらすたゝか
くばかり世ははてぬかな

山中やまなかの一夜の夢ゆめの興きようふかしさながらへな
ばわが世はたらむ

日記にき筆ふでも今は倦うんじて身もやせてしのび
し戀も又つかれぬる(旅にて)

武藏野の草戸くさどごしなる月影のとはにやど
れやすゝき萱

高く低き雨傘のせてわたし舟柳の蔭をい
まはなれけり

見るがうちに黄金こがねのいろのそゞろ雲紫金しこん
となりて桃にかゝる里

玉ぶち

杜鵑花

花模様あせはしつれど戀ごろも御墓みかにか
けて春かたらはむ

戀ふる子に似ます御相みさうもおはすやと欄間らんま
ながむる香華院かな

昨日までこの世に見たる君が里井みなる椿
よなほもしろかれ

木がくれの君が御墓の白つゝじいまさば
ともにかざゝましもの

こぞびとのその夜に似たるこの夕べ小笹
の雨の軒にさびしき

玉ぶち

玉ぶち

かくなりとのみつげは冥府の鐘のごと幸
なる母の夢をさましぬ

文車に御經をさめて僧ひとりむかしがた
りを思ふこの春

こぞの秋こぞの今宵の日記を見てことし
の秋を誰にかたらむ

木 佛

火中のはなにゑめる思ひのごと、
慈相ゆたかや、あゝ古き鑿のあと、
神秘こもれる金色のみ胸に、
理想をつゝめる九品蓮華の彌陀。

玉ぶち

瑞葉の木蔭——讚頌の精こもる。
曼多羅華ふる春の夕まぐれの、
天の紫雲にまかれていま樂供養——
讚する鑿の匂ひしのばるゝを、
われ滿徳の詩に瘦せてわびぬる。

こゝに永劫、巡禮の影見えず、
信はつかれて寂寞のあゝいま、

われ額づけば「極」の美、靈の光明、
その藝の手にふれて情は湧けど、
人はとはじよ、——八相の鑿のはえ。

梅檀林賦

奇靈の黄金鳳ほのかに見ゆる
 瑞木の林、さても知りつや——聖燭
 よみがへり照る理性の花の薫香
 (深林——一味の秘密) 誰かさぐらむ

蒼穹、明星の光にゆるゝその歡樂、
 いま、腫にこもるよ、——丈六の聖者。
 奈落の空鳴おちす生弓ひける
 凡夫にたびし慈悲よともるゝ獅子吼を、
 逍遙として林間に尋ねゆけば、
 聖壁もる光明の樂境や、——聖ごゝろ。

『無明の闇に光あれ』とのろへる

咒文の金字、永久に光るよ。——人びと、
この森、無價の珍あると渴仰すれど、
回憶——切なるわれらの靈は冷えて。

うもれし戀

いかなれば闇きに沈む。
不生見よ、いのちは凝りて
をろちだま且つは火焰と、
黒渦のまきてぞ見ゆる。
こはうつゝ永久の怨靈。

あなうしや、わく子の詩歌、
あゝこれや、うもれし戀ぞ。

人の世のあはれ戀花、
靄もやがくれ透すては見れど、
遠とほの島、たよる船なく、
あゝ闇よ、灯ともしも消えて、
黒潮くろしほの荒磯あらいそづたひや。

靈の花、天の玉髓ぎよくずの、
そをのろふわれや、火蓋ほざらよ。

あるかなきかのとげ

(畫伯和田英作氏作書)

精舎じやうじやの庭の春に得たる刺とげの
小指こさきなやます、さあれ、身は熱ほりて、
あゝまた痛み知りぬ戀こひの傷きずゆる。

あるかなきかのとげ、やはらかに、
さぐるは玉手たまて、今見よ、目敏めさとしうも、

ふたりの心は見ひらき、むつびあへり。

こを見て誰かは新たの繪とは知らむ、
百ももとせ過ぎし昔か、否いなまのあたり、
不壊ふえなる戀こひの證あかしと、かくて千世ちよ經め。

よろこび足らへり、にほひ満ち輝けり、
あゝそのむつごと洩あはらせよ、戀こひびと。

幽界の少女

天の羅八尋彩翅の榮を添へて、
 黄金波うつ御髪にこもる徳と讚へし
 戀愛、慈相、あゝこは冥加の寶珠瓔珞、
 さあれば汝が想、天の醍醐味甘露のごと。

胸乳あらはにいだける百合の精涓滴るゝ
 甘露にゑひし天の彩夢——下界の瑠璃戀
 (あゝ寂寞の靈——いま水仙の花と化りぬ)
 聖女のみ手にもてる白百合の真中にて
 いねる胡蝶の平和の夢見ることくに、
 醜草にすむ蚯蚓さながらのわれは、今
 かくは思へど幸無や——摩尼珠、靈の光明。

星界あめよりおちし瑞花みづはなの精せい、奈落ならくの闇やみそこに、
薊あざみと化なりて焔ほのほ掩おほへるを人は泣なけども、
汝なが幽瞑ゆうめいの花はなを讚ほめする奇くし界よは何時いづ。

羊麻草

星姬ひとよ一夜戀ひとよこひの運命さだめを怨うらみて、
天宮あめよりおちし罪つみの精せいよ、今こゝに、
どくだみと化なりて寂さびしき夢ゆめさめず。
その遠流をんる、いよいよ罪つみふかく見みゆる。

塵寰の花となりし君の有相

夕ぐれおもうて慰む詩の情に、

うたゝや、寂寞のなやみに泣きぬるを。

あゝなになれば人はとはじ。——醜草の精

さもあらばあれ、前世ちぎりし君の

面影ながらの花の真魂いだきて、

今や、戀幸もれたるあまき接吻。

(劫風吹けども知らぬ戀の狂ひ子。)

な忘れそ、——この幽冥の花の熟睡、

「極美」こもると讃へしこの悲曲。

白百合の精

理想世界に燦らめく金色の宮に、
 さゝやぎゆたかの天つ女ながもてる。
 靈妙の花——美の精粧ほふ簪か——
 さあれど白百合——詩の犠牲おもふ

趣の子、下界にこの花の讃作る、
 『ソロモンが榮花の装ひ
 その神聖さ、純潔の百合に及ばじ』と。
 星姫の簪てふ白百合の精。
 (美の粹、永久の平和、興の「秘密」)——
 詩人久遠切、渴仰の花よ。

ミチルヲ見守る天女が抱ける
 瑞花百合の光 芳香をおくる。
 天童の翹さながらの白妙は、――
 これ何の壯嚴、汝がみこゝろもゆかしや。
 かくてぞ多慢にゑめる白百合姫、
 破壊は迫らぬ和魂――聖愛の美聲。
 その應へはなべて百合にこもるか。

清き戀にゑめる花守のいます天華。
 垢土に邪める幸の緋桃、むらさき、
 たとへば薊のそれに似たる戀の
 冷えし血汐にそまらじ――美情の花。
 わが情、あゝ又美しき白蛇に、
 いつの間化りて汝が花にからまりぬ。
 天女そをかざして花祭せよ。

今、詩人の白き愁のこもれる
藝苑げいえんに生おひし白百合びやくりくの精せいを拈ねじ、
神秘しんぴにさゝぐる汝ながおほみごゝろは
久遠劫くゑんけつ、この靈花れいけの精せいにこもる。

白毫光

こゝなる濁世だくせいの廣原ひろのを闇やみに
放浪さつりやうふこゝろのえ堪たへずなりて、
無盡むじんの燈ともしにあこがれぬれば、
爛壞らんえの都みやこをぬけてぞ行かむ。

かくてや。噫あや、われ涅槃ねはんの村むらに、

光明を浴びにし安住の衆生と
瑞樹の葉蔭にうまいもせむと、
ふとしも深入る、寂たる森に。

秀樹の葉かげをもれくる妙音——
あゝこは梵音、辿りて來しに、
いづこや、靈場——白毫光に
きらめく寶樓、あゝこは夢か。

大なるいのちのこもりし森に、
金字の石碑見いだしたれど、
無邊界てらせし白毫光の
相あるみ親にはぐれしわれや。
命の大森、あゝ、みなうつろ。
見ゆるは炎上み胸の底に。

さあれば泉いづみの清水しみづをくみて
渴かきし心こころを癒いやさむ、あゝ今、

あれ見よ、下ふ思議しぎや、泉いづみにうつる
慈悲じひなる御影みかげの無量光むりやうくわう、
あゝこのまたゝき、たのしや、さあれ
なほしもこの土どはいよいよくらく。

思はれ人に(二章)

○
君よ、など情なさけあらざる。

世の人は、

あめつちひろしと笑あまひもすれど。

胸血むねちもゆるも君ゆるゑに、
詩歌しうかを謠うたふも君ゆるゑに、

鋤鋤もつも君ゆるるに、
噫、いつの日か君の情あらむ。

見よ、戀神、

百夜の犠牲燭

焔となりて渦まくよ、

○

君、なになれば聖愛厭ふや。

世の人は

なりとこがねをたへもすれど。

桃の枝を小筆となして、

紫の酔歌をつくる、

室むつましき詩人を、

噫、君さやは思へる。

見よ、君の世、

玉ぶち

くろ髪の亂れわび、
とはに戀幸あらじよ

金絲雀

春のみ空の平和の園に、
希望のひゞき幽かにきこゆ。

馴れし昔の人の思ひ出、
またふる郷を歌う調べか。

玉ぶち

さなりや、さなり、地をへだて、
あなや術なきわれの夢見か。

あゝわは君とあたゝかき血を、
ひとつにせよとちぎりし夢の。

そのまぼろしの二つつなぎて、
神にさゝげよ黄金かなりや。

なれはゆかしき人のおくりし、
濃き紅房の古色の籠に、

すべてを君にかたどれる世に、
春のくれをばまた囀づるか。

ふたゝび君とわれのあや夢、

玉ぶち

なが紅べにぶさの中にこもりて。

また天あめよりの調べの「妙」たみを、
永久とこの希望のぞみとともにまたなむ

人とば

人とは、さびし、この紫蘇しそ。
黄金こがねなす

夕日、なびきて、

ほろほろと

花は落ちにき。

玉ぶち

玉
ぶ
ち

人とはい、あはれ、この紫蘇。

慰藉の

幸も、ほろびて、

柴垣の

匂ひあせにき。

人間は、憂しや、この紫蘇。
身まもれど、

君は語らず、

この秋の

思ひ、悲しき。

玉
ぶ
ら

玉ぶち

蘆

笛(ある友におくる)

蘆笛吹ける里の子。

われえ堪へむやもろき胸、

その名を秘めて今も泣きぬる。

わがゆくするを問ふなかれ、

おもひながるゝ

むらさきの水。

とある日、なれが才さいにすねて。
さあれど惜しき

『碧淵』の句よ

煩悶もたえを共になして、

玉ぶち

蘆の葉ゆする風に興じて、
世を笑ふ理想の友。

あしの葉ならして調を得たる、
兄をもとめし
われのえにし。

誦せむか、友の句。

情もふかし、

胸にひけるあし笛のごと。

汝が笛ふきてこの秋
瑠璃に似たるわれの涙、
ぬぐはむ。いざ君。

血汐にぬれしわれの片袖

玉ぶち

紫むらさき模も様よう

その罪とふな、われも情じやうの子

わが理想おもひのわかきを、

ゆるせや。いざ君。

あしぶえ吹ける里の子。

なれが蘆あし笛ふえに得たる、

木枯の句を讀よみすれば、

『自然』はるみて秋ふかし。

玉ぶち

廣大池のほとり

椰子の葉をたゞきし
赤熱の疾風に、
篠懸を裂かれて、
躓きし外道や。
紫の夕雲

ちぎれてはうすれゆく。

乳の香の涓滴
餓鬼がもつ猛火の
おほ蓋にそゞぎて、
天堂の供犠にと、
金剛の杖つき、
今こゝに、はせつく。

あはれなる婆羅門、
祭壇の祈禱に、
にへざらを捧げて、
天地を揺らむ。
曼特羅も倦んじて、
蠟涙は冷えたり。

靄がくれ、不壊なる
靈塔に燦めく、
金色の光明に、
慚愧の行者や。
嬰兒を抱いて
怖氣なるまなざし。

一念のおもひに、

玉ぶら

却風はおこりて、
窃冥門の猛火や。

(妖の廣大池)

火食鳥、紅蓮を

つみさりて雨ふらす。

『魔が棲める虚洞の
火蓋なるわが生、

おほ天にかくろふ

慈悲心の鎖に、

つながむと思へど、

浄土見よ、とざせり。』

今、天華の香に酔ふ

柔胸は脈うち、

よみがへるみ魂か。

玉ぶら

玉
ぶ
ち

おん神の使者なる
靈鳥は比翼に、
愛の矢をつゝみぬ。

常夏の瑠璃宮、

その壁にきらめく

遍照の光明や。

こは天の莊嚴——

千葉の紅蓮は

黄金扉の手さわり。

玉
ぶ
ち

落

紅(有髪の尼君におくる)

ちぎれゆくむらさきの
雲のごと、
夢はながるゝ、
ゆく春の
伽が籃らんに倚よれば。

いと清く細き筆、
あたゝかき
水にひたして、
慰藉なぐさみの
つきぬこの里。

あゝ君が永久とほのさち、

ひたすらに
光明ひかりを追ひて、
とこみよの
星をもとめき。

かをり濃くにほひよき。
百合とこそ
人はめづれど、

仇かたなりや

君のみをしへ。

今、紅のちさき花、
集に入れて
おもひありやと、
捧ぐれど
情なさけあらずよ。

わかば集(絶句四章)

△渦

戀^{こひ}幸^{さい}えがたきこの世となりて、
今また希望^{のぞみ}のあくがれなきに、
渦^{うず}まけうづまけ地ぞくづるれば、

この世のたゝかひ空しくやまむ

△虹

悪魔の洞^{ほら}とはこの渦^{うず}真^ま中^{なか}、
見よわが失意の魂^{たま}はこもると、
白蛇のいぶきにふれたる如く、
高^{たか}鳴^なる血汐のひゞきあるもの。

あゝ今、われは戀にすねて、

つらき里より孔雀いだし、

金粉ぬりたる橋をふみつゝ、

龍女の宮へとしのびゆくか。――

夢のたいちとかざる小虹輪、

ゆく春うらみし里の葉櫻に

酔へる詩人のやさ眉あげて、

うたひし夢ともかへりみ多き。

△文机

なが世青かれ。――経よむみ子の、

理想の苑も花はしほれて。

今、ゆく春の日記をひもとき、

また思ひ出や、青葉木蔭に。

さあれば文机いともすいし。
花瓶、九品の香をおくりて、
本性きよき夢をさそへば、
天部の遊びにさながらなりや。

△寶冠

その榮、われにはつらく見ゆる、
王者がかむれる髪のかざり。
平等自由の天則を掩うて、
かつては、快樂の民をあざむく。

金剛、瑠璃のはえのかざりは、
われにはあくたの醜と見るかな。



分 追

玉
ふ
ち

寶冠かむりて誇れる子らよ、
濁世おどろの中にしてよな

追分

この信濃路の谷間かげ
世なれぬ愛の精こもる
名なし小草の花に酔ふ
興をとほや、ゆく春の。

玉
ぶ
ち

あゝさめぬれば冷えぬれば
さびしき眉や、瘦せし額ぬか
(今春怨しゅんえんのかげ淡く)
なれ、牛追ひのをとめにや。

世のたしなみも打ち忘れ
朝な夕なに牛ひきて
市いちに炭木すみぎを追ふごとに

煩悶わだえわするゝすさび唄うた

(われには甘きうた口ぐちの)
この『追分』の一ふしを
わが草笛くさふエにのせしとき
またうらめしき調しらべべする

その鄙振ひなぶりの興冷えぬ

今をとめ子が謠ひつゝ
右手に鞭うちいさむれば
おもむろにゆく牝牛かな

あまりにのろき牛の足
(煩悶^{もたえ}わきぬるこの胸に
泌^しみる響きの平和^{やはら}は
いとふさはじよ、暮れし路)

この夕まぐれ春の水
にがくすゝりし牛は今
またさびしくもわなゝきぬ
なれもをとめの世になくか

樂所^{がくそ}にうとき牛追ひの
草笛にえし『追分』は

悲曲ひきょくこもれる鄙振りの
篋くご篋ごや、鉦鼓しやうこにあらぬ音ねよ

魔金まがねの扉とをば夢見すも
ぬくき血汐ちよのうな原に
(若わかきに誇る手てをとりて)
紅蓮ぐれんの舟ふねをうかべばや。

靈鳥の歌

あゝ深紅しんく、珊瑚さんごの
沙洲すなづをば翔かりて
疲つかれては神聖しんがう
靈鳥れいとうよ、いぬるか。

あゝ今いまや黎明れいめい

またなれが伸羽を
虹のごと擴げつゝ
夏花を誇れよ。――

金泥の聖池に、

睡蓮はくゆりて、

塔影もゆらぎぬ。

(光明の離垢土や)

古塔に棲みにし
をとめごのあやかし
籠りぬる睡蓮、
こは生命――眩ゆき。

大輪のはなびら。

いま露のころべば、

あゝ愛は美しと、
かすかに聲あり。

歸依きえの手の觸ふれてか、
觸亂じよくらんも忘れて、
深紅しんくなる妙華めうけに、
ほこりぬる靈鳥。

あゝ、聖體せいだい、こは秘蹟ひせき、
いままた愛の花の香、
そにゑひていねむか。
いざ『我』や、——靈鳥。

何の響き

—

天華^{てんけ}にねむる蝶のごと、
いま黙想^{もくさう}にふけぬれば、
天^{あめ}の宮居の戯れに、
花渦^{はなうづ}まける音にも似て、
幽^{かす}かに響くものは何。

禍神^{まがみ}わらひて、寂寥^{しじま}なる
よみの扉^とひらく音にあらじ。

—

いま幽溟^{ゆうめい}のおほ海の
生^{せい}のおほ潮磯^{しほ}ふれば、
運命^{さだめ}の巖^{いは}にとまりぬる
雛戀^{ひなこひ}鳥^{どり}のしとゝにも、

彩羽あやばぬらしておほあめの
邊へつ國くにさしてあこがるゝ、
その一ひと聲こゑを慕こぼふとき

三

あゝ西にしのそら、莊嚴しやうげんの
宮みやへといそぐ天童てんどうが、
新妻にいづま迎むかふ花はなぐるま、

いとおごそかに轟とどろかす
そのきしる音ねか。あるは又、
戀路こひぢづたひの天あまつ女の
いとえ堪たへげのきぬすれか。

四

或あるは少女せうにょの彩衣あやころも、
そよろと金屏かねびんすべる音ねか。

歡喜まなかの樂の音に、
百花あめふる健闘婆城、
さながらのものなつかしう、
われも天宮にまろいして、
愛のさゝやき聞かばやと。

五

さあれど今や地に墮ちて、

世の凋落にわづらへば、
神よりうけしとがしめに、
天にのりゆく舟も無し。
金銀瑠璃の戀車、
珊瑚琥珀の玉だれの
御簾はしづかになびけども

六

あゝ戀神よ、なれは今、
孔雀彩尾をひけるごと、
驕盛あまりにふさひてか、
その装ひを嬌羞ひて、
轍の音にも身をなやみ、
帳かゝげてしのび居の
思ひごゝろもつらからむ。

七

み胸の動脈く地の子らが、
熱燄の凝りし彩雲の、
なかをのりゆく君なれば、
といろときしる戀ぐるま、
愛歌のひゞきそれならむ。
天部の樂にあこがれて、
われも使命をおもへども。

八

美眸もこりし執着の
 ほのは狂ひてふと消えて、
 光うすれしそのときに、
 神の戯れか。うつゝとも、
 夢とも知らず、ふと見れば
 黒髪ぬれて春雨の

乳の香ふかき戀衣。

九

夢は流れて、そらは闇黒
 いまし甘睡の野はさびて、
 おもひの花をなげくとき、
 罌粟の花ちるそれのごと、
 幽かに胸にひやく物。

そは大光明のゆるゝねむ。
はた神琴のゆかし音か。

龍女の歌

—

あら、こは幻妙、不思議の海よ。
大波小波は祈禱のひびき、
有頂の天より金輪際の
天地くだきし、そのとゞろきや。
見るみる魔雲は尾を引き垂れて、

幻術變化の自然や、またも
 たちまちしら霧萬象みえず、
 見ゆるは白衣の天女がひとり
 あこがれごゝろのさすらひ姿。
 あなやと見るまにみ空も晴れて、
 まばゆき多寶の海樓、そよや、
 長生驪山の淨土はこゝか、
 太眞の額ある御殿のさまよ、

翡翠九華の帳をのけて、
 眞珠、瑠璃玉、紅玉、碼碯
 摩尼珠のみすだれ又かきあげて、
 龍女、珊瑚の朱欄の下に
 ながしめ姿や、靈香はあれど、
 み髪もほゞけてほのほと見ゆる、
 あゝ、こは何等の煩悶なるや。
 こゝろはねたみの火燄になやむ、

法力たのみし善果によりて
 五障の滅罪たやすくあれど、
 蛇身はひと日にみたびの苦難、
 肉をも焼きぬる三熱こそは
 なが世の絆となほ生ひたゝめ。
 あゝ、又龍女がたゝへし梟鐘、
 一念執心の怨霊こもり、
 おのづと大地の六種も震動ふ。

あら、また汝が海藏みれば
 多寶も永々の流轉の垢や、
 讚歌をおこたる障碍とおもへ。
 今、なが點せし龍燈のあかり
 嗔恚の息吹や、猛火となりて、
 渦まく焔の呪ひ火、蒼火、
 おのづと身を焼く八熱なりや。
 あゝ、十羅刹化現の龍女、

佛陀の寶玉さゝげてさらに、
懺悔の淨水もてそゝげよ、女體、
腮の胡髯おのづと斷たむ。

『八大龍王』

哀愍納受』

二

嫦娥の遊化する

寶海の珊瑚に、
光明をはなてば、
胡髯を打ちまき、
龍女は躍りて、
天上の紫雲に、
渴仰をかもしぬ。
鳧鐘をたゝいて、
煩惱の珠數をば

さらさらと押しもみ、

上天の靈術。

あら、見ゆる靈異の

佛塔は、きらりと、

憧れの信力、

七度の祈禱に、

むらさきの靄わけ

たどりゆく善途や。

あへぐごと精舎の

七寶の扉に倚り、

誓願のいのりの

稽首をばあはれと、

如來はおぼされ、

淨滿の帳を

そとあげて、あゝ今、

おごそかにのり給ふ、

「龍女よ、善哉。」

大覺の世尊は、

神力の光明を、

十方に放ちて、

今生の汝が苦を

救はんと、あゝ今、

無縁なる大慈悲、

觀音を念じぬ。」

ありがたや、龍女は

あゝ、何の宿縁。

冥感に又もや、

歡樂のなんだを

ほろほろと落して、

み佛にまをさく、

「わが秘めし靈玉、

淨光のきらめき、

尊とくてありしが
 不淨なる女體に
 觸れしよりさびにき。
 邪見の一念、
 黒渦のほむらと
 燃えたちし心の、
 生々世々なる
 この垢をおとして、

阿鼻の底やみなる、
 あら玉の光明も、
 えさせませ、慈尊』と。
 海藏の寶玉、
 瑠璃光の摩尼をば、
 歡樂のしらべに、
 白衣の薄裏
 金風にかへして、

聖燭のゆらげる

天壇にさゝげぬ。

あら、會場、そを見よ、

龍女が捧げし

如意珠の大供養、

金文字や、紫文字の

讚嘆の偈も成る。

『平等の一味雨』

『金龍も躍らむ。』

三

あな、おそろしき金翅鳥王の

餌なりといふ哀れの龍女、

この八潮路にその身を隠し、

あゝ、迦具土になやめる口を、

癒やさむ『法脈』、あゝ今納受。

浄水みそぎて發願すれば、
 火焰のうづ環は紫雲となりて、
 無憂の樹下に寶玉供養、
 聖燭ゆらぎて、金泥の御經、
 誦しぬる汝が姿もさやか、
 あゝこの勤行ゆかしや龍女、
 紫檀の祭壇いのりをあげし
 讚佛無上の善果や、密咒、

『汝等畜生成道作佛』
 直下に、紫雲の影向さして、
 都卒の樂なる『萬秋樂』の
 調べに憧がれ、散華の驕樂
 あゝ見よ、見佛、あら又菩薩、
 曼多羅ふらして舞ひそめ給ふ、
 何等の莊嚴巍々たる御堂、
 浄土の苑ぞと靈夢はつげぬ、

あゝ、こは美無上又讚無上、
 多寶佛塔、嫦娥の宮殿に
 そのさまさながら、目も彩どれる、
 三千大千世界もきらゝ、
 そよや、あら海龍女が洞も
 光明きらめき、魔雲も晴れて、
 八大功德の巨海と現じ、
 瑠璃淨光にくろしほ消えて、

天樂もれくる甘露の御門、
 石榴の紅花そよろと落ちて、
 曇華はふたゝび妙香を放つ。
 こは靈境よ、天龍八部
 黄金扉叩け、救世の寂光土。

『草木國土』

悉皆成道』

近刊詩集
蓮の花の舟

池本奇璨君作

複製を許さず
定價金參拾錢

明治四十年二月十二日印刷
明治四十年二月十五日發行

發行者	池本周山	印刷者	山田英二	印刷所	博文館印刷所	發行所	園屋書店
	<small>東京市神田區三崎町三丁目一番地</small>		<small>東京市小石川區久堅町百八番地</small>		<small>東京市小石川區久堅町百八番地</small>		<small>東京市神田區三崎町三丁目一番地</small>

米國文學士松田孝太郎君譯

圖解 演說の仕方

近刊

玉ぶち

玉ぶち

玉ぶち正誤表

四一頁第四行、北越に遊びては北陸に遊びて。——六五頁第四行、七四頁第六行、七
 七頁第五行、一〇一頁第一行等にある壞(え)はる。——七四頁第三行、白妙(しらた
 へ)はしろたへ。——一四一頁第二行、碼礪(めのう)は瑪瑙(めなう)。——一四五頁
 第八行、煩惱(ぼんのう)はぼんなり。——一〇〇頁第六行、蠟淚(らふるい)はらうる
 ろ。以上訂正す。

村田祐治 兩先生編 二木要	新撰 分類 英文佳句難句集	卷一第	版五第	定價金參拾錢 郵税金四錢
同 上	同	卷二第	版三第	定價金參拾錢 郵税金四錢
第一高等學校教授 村田祐治先生講義	英文佳句難句集詳解	新刊	第一卷第一回	定價金貳拾八錢 郵税金四錢
小川末之丞編	英和對譯 ゴールド、ダスト	袖珍本		定價金全一冊 郵税金貳錢
佐々木志郎著	英語句點法	袖珍美本		定價金全一冊 郵税金貳錢

矢野鳴海君著	霧立會案	稻葉一止君著	可南子著	宮島法學士閣 相馬宏君著
百人かるたゲーム	百人練習かるた	小倉百人一首 附畧解	祝祭送迎 婚禮葬儀 準備案内	民法新 對照令 相續稅法註解 附相續 手續案内
第二版	上旬付	袖珍美本	既刊	既刊
洋裝全一冊 定價金貳拾錢	紙函入一組 定價金參拾五錢	洋裝全一冊 定價金六錢	洋裝全一冊 定價金貳拾錢	洋裝全一冊 定價金貳拾錢

櫻井碌哉君註	學生タイムス社編	前田林外君序 池本奇琛君著	古川新策君畫	川上千鳥君著
英文脚註 美人と鬼人	學生獨占ひ	詩集 玉ぶち	かるたゲーム繪葉書	笑ふ門
既刊	新刊	新刊	既刊	第三版
洋裝全一冊 定價金八錢	洋裝全一冊 定價金六錢	洋裝全一冊 定價金參拾錢	三枚一組 定價金拾貳錢	洋裝全一冊 定價金拾錢

矢野文雄君序 矢野道雄君閱 矢野成美君著	川上眉山君著	坪内博士序 三木竹二君校 水口徵陽君	小出先生題詠 木村博士序 契冲師撰	東京府師範學校教授 小出雷吉君作
和商業用語集	ふところ日記	近松全集	百人一首改觀抄	廣瀨中佐
近刊	第四版	中卷近刊	第三版	既刊
洋裝美本全一册 定價金參拾五錢 郵税金四錢	洋裝全一册 定價金拾八錢 郵税金貳錢	洋裝全三册 定價各金壹圓八拾錢 郵稅各金拾五錢	洋裝全一册 定價金貳拾五錢 郵税金六錢	洋裝全一册 定價金參錢五厘 郵税金貳錢

